

浦賀文化

第83号

令和7年10月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

久比里のこと

久比里の由来と地域の特色

今回は浦賀の分郷となった吉井のことをとりあげたが、今回は吉井と同様に西浦賀分郷であった久比里のことを取り上げる。しかしながら、分郷としての扱いは吉井と同じで、分郷となった経緯については前号を参照していただきたい。また、特筆すべきこととして明治四年に久比里坂の開削が行われたことがあげられる。こちらは本紙第十二号の一面で「浦賀港拓道碑」という見出しで取り上げられている。ご興味のある方はそちらも参照されたい。

* * *

「浦賀志録」(以下「志録」)

によると、久比里はもととも「五戸ノ半農半漁ノ荒蕪地」であったという。しかしここは浦賀の元となった土地で、「元浦賀」と呼ばれていた。このいきさつはというと、「浦賀」はかつては「浦河」と言い、もともとはこの久比里のあたりのことであった。現在の浦賀の地域が「浦河」とされたのは鎌倉時代のことと、それにともない久比里のあたりは「元浦河」となる。「浦河」は

やがて「浦賀」となり、「元浦河」も「元浦賀」となったという。

そんな「元浦賀」でもある久比里だが「久比里」の地名の由来はというと諸説あり、まず一つは「鎮守若宮神社の社殿床下にあるくびれた石」である。これは天保期に編纂された「新編相模国風土記稿」(以下「風土記稿」)の「若宮権現社」の項目に「神体木立像社の床下に石あり長二尺五寸許土人は是を崇敬す、石の形中程くびれたり、久比里の地名是より起れりと云」とあり、大正四年(一九一五年)に発刊された「浦賀案内記」でも同様の記述をしている。

一方で明治期末頃に出された「志録」ではこの説を「甚だ怪しい」としてもう一つ「内川の川尻にあった平等寺崎から相對して久里浜の漁家を見ることができた。そのためこの辺りを久里浜に比ぶところの里として久比里とした」というものを紹介している。「志録」ではこれも「不穩当」としているがどちらが的確かとするならば「後説の方」としている。

昭和三十七年(一九六二年)

発行の「横須賀雑考」(以下「雑考」)ではさらにもう一つ「ややこしい話」として紹介がある。この話は久比里の郷土史である「私たちのまち くびり」(以下「くびり」)にもやはり「ややこしい話」として紹介されている。内容はというと「惟喬親王と惟仁親王が皇位を争った際に伴善男大納言が左大臣源信の専横を憎み、これを亡き者にしよう」と藤原資盈に助力を求めた。資盈はこれを拒否したため大納言は彼をそしり、悪者にしようとした。そのため資盈は父子三人と郎党五十三人で船で筑紫に逃れようとした。ところがその途中に嵐にあつて船は流され長男は房総に漂着、資盈夫妻は三崎の花暮に漂着した。それからしばらく後、一羽の鳥が大納言の首をくわえて飛んできたが今の久比里のあたりで墜落、これを見つけた土地の人々はすぐさま訴え出た。これ以降この場所は「クビキリ」といわれ、やがて訛って「キ」がとれて「クビリ」と呼ばれるようになり、「久比里」となった」というものである。

地名について、何が正しいというのとはなかなか難しいところがあるが「雑考」や「くびり」にあるように久里浜のおこりであった「久里」につづく里であるとか、「久里」に比ぶ里であるといった、地理的な位置を由来としたものの方が個人的には信憑性があるように思えるがいかがだろうか。

(山本 慧)

*専横：わがままで横暴な振舞い
我が物顔に振舞うこと



「久比里周辺の地図」
浦賀中興雜記より

★参考文献

- 『新編相模風土記稿』第五巻 雄山閣 一九八〇年
- 『浦賀志録』上巻 加茂元善著 横須賀市 二〇〇九年
- 『横須賀雑考』 横須賀文化協会 一九七四年
- 『浦賀案内記』信濃屋書店 一九一五年
- ・小川清治『私たちのまちくびり』 小川栄子 一九九四年

千代ヶ崎砲台一三〇年のあゆみ

―千代ヶ崎砲台の竣工後から昭和初頭まで―



千代ヶ崎砲台跡

日本は日清戦争で得た多額の賠償金を軍事に充てて軍備の拡張を行います。下関条約により日本に割譲された遼東半島の領有をめぐる三国干渉が生じ、日本とロシアの関係が緊迫します。そして明治三十七年（一九〇四年）二月、日露戦争が始まります。同時に各要塞にも動員が下され、千代ヶ崎砲台にも不入斗の重砲兵連隊から編成された要塞砲兵が二八糶榴弾砲六門、一二糶加農四門、七糶野砲四門の大砲とともに守備に就きました。翌明治三十八年（一九〇五年）九月にポーツマス条約の調印により戦争は終結し、東京湾要塞の各砲台に配備された砲兵たちも平時編成に復員しました。

前号では千代ヶ崎砲台の建設（明治二五年～二八年）とその役割についてお伝えしました。今号では、竣工後から昭和時代初頭までの千代ヶ崎砲台を見ていきましょう。

建設途中に日清戦争が開戦したため、六門据え付ける設計だった二八糶榴弾砲（にじゅうはっせんちりゅうだんぱう）を急ぎよ四門のみ設置しましたが、戦争終了後、残り二門の榴弾砲を据え付け、軍道の開設（明治二九年）、監守衛舎建設（明治三〇年）、砲具庫増設（明治三四年）と砲台諸施設の整備が進められました。

陸軍は明治一三年（一八八〇年）の観音崎砲台の起工以来、日本の各地に要塞建設を進めてきましたが、日露戦争前後の火砲の進化と第一次世界大戦（大正三年（一九一四年）～大正七年（一九一八年））での航空機の出現に伴い、旧式化した砲台の整理を開始します。その最中、大正一二年（一九二三年）九月、関東地方を大地震が襲います。マグニチュード七・九と推測される関東大震災です。関東各地は甚大な被害を受け、東京湾要塞を構成する砲台群も被災し、砲台の復旧と整理を同時に進めることとなりました。東京湾要塞の砲台では、陸軍の防禦施設から除籍（廃止）されるものが多い中、千

代ヶ崎砲台での震災の被害は「被害僅少」と記録され、除籍の対象にはなりませんでした。

震災の復旧が始まる一方で、同年一二月から千代ヶ崎の地で新しい砲台の建設が始まります。山上の榴弾砲砲台から一段下がった舌状台地（標高約四二m）に戦艦鹿島の四五口径三〇cm加農一基が据え付けられた「千代ヶ崎砲台砲台」です。

この背景には、軍縮を進めることになった世界情勢があります。第一次世界大戦での悲惨な結果とその後も続く軍備拡張計画に伴う経費の増大が各国の大きな負担となったことから、大正一〇年（一九二一年）にワシントン海軍軍縮条約が締結されました。日本もこの条約を批准したことにより、日清・日露戦争後に進めてきた軍備拡張路線の転換が求められました。軍艦の廃棄に迫られ、旧式艦や建造中止となった艦船の搭載砲を陸上の要塞砲に転換するプロジェクトを海軍と陸軍で協力して実施。その後、試験を経て要塞に正式に設置された第一号が千代ヶ崎砲台砲台（大正一四年（一九二四年）竣工）であり、機関室などはすべて鉄筋コンクリートで建設されました。また、八式海岸射撃機と呼ばれる射撃用の観測具も開発され、千代ヶ崎の丘陵の南端に設置されました。砲台砲台に関連する兵舎なども建設され、千代ヶ崎の地は山全体が軍用地として利用されることとなりました。

（教育委員会生涯学習課 川本真由美）

笑話一題

流行ってますよね。推し活。好きな人やモノを一所懸命応援し、愛でる活動。それが推し活。そしてその活動の対象が「推し」。みなさんにはいますか？「推し」。ここ浦賀で見つけられたらいいですね。例えば40代浅野長祐なんてどうでしょう。仕事ができる上に絵や書を嗜むアーティストで、「殿中でござる」の浅野さんの家系らしいですよ。仕事ができると言えば8代久世広民も。どんな争いごとでもまーるく収める仲裁名人です。仲裁と言えば、桜吹雪をしょって名奉行のモデルと遠縁の34代遠山景高もいかが？そうそう、忙しいからって理由で生まれた、21代内藤正弘と22代筑紫孝門の二人組ユニットもありですね。それからあのペリー提督に「ノリの良いイケメン」と評された31代伊沢政義も捨てがたい！……誰の話かって？みんな江戸時代の浦賀奉行ですよ。五二人もいましたから、きつというんな人がいたでしょう。あなたの「推し」もきつと見つかるはず！

（港のヨココ）

★★★俳句実作講座開催のお知らせ★★★

俳句に親しむ

俳句づくりの基本を学び、吟行～句会までおこなう全4回の講座です。

日時 令和8年1/10・17・24・31
(毎土曜日)

場所 浦賀コミセン分館

参加費 50円

定員 抽選20名

講師 芳賀久雄氏(横須賀俳句協会会長)

締切り 12/16(火)必着

※詳細はちらし等でご確認ください。

